

文禄五年豊後地震における沖ノ浜の津波高7ブラサの検証

松崎伸一*(四国電力株), 日名子健二(郷土史研究家), 平井義人(日出町歴史資料館・日出町帆足万里記念館)

§ 1. 文禄五年(1596年)豊後地震と沖ノ浜

沖ノ浜は戦国時代に府内の外港としてポルトガル(以下、「葡」と記す)の船が来港する等して殷賑を極めた。しかし豊後地震津波によって壊滅。この津波被害を記録した『イエズス会日本年報(1596年・年報補遺)』(ルイス・フロイスが葡語で記述。邦訳版としては例えば松田(1987)。ただしラテン語版からの邦訳)では、「七ブラサ以上の高さで(波が)打ち寄せた」とある。1ブラサ(braça)は村上(1927)が『耶蘇会士日本通信』で2m2分と注記したためか、以後の研究では2.2mとされており、単純に換算すると津波高は15.4mとなる。従来、府内の津波高は約4~5m[平井(2013)]と考えられており、両者は大きくかい離する。杵築の津波高が約4~5m[平井(2013)]、佐賀関が約6m[松崎・他(2015)]とされており、15.4mはにわかには信じ難い値である。

§ 2. フロイスとイエズス会日本年報

フロイスは、1582~1597年の間、『日本年報』を執筆し、ローマのイエズス会総長に報告した。布教に資するための情報収集(諜報活動)を目的としており、宗教関係の誇張や偏見の記述を除けば、ある程度の信頼性はあると考える。しかし地震時にフロイスは長崎におり、自身が津波に遭遇したものではない。沖ノ浜の住人ブラサからの伝聞情報である。さらにフロイスは葡人であり、年報を葡語で執筆した。年報はイエズス会本部でイタリア(伊)語、ラテン(羅)語等に訳され、書籍として刊行された。歴史地震研究においては、1599年に出版された伊語版及び1605年に出版された羅語版からの邦訳版が主として利用されてきた。つまり既往研究は何れも重訳に基づくものであり、信頼性に懸念がある。そこで葡語版に立ち返って検証を行うこととした。

§ 3. 葡語版における記述

葡語版の年報はイエズス会文書館が所蔵している。豊後地震津波については、「Diz que de noite deraõ naquella povoação de repente duas ou tres ondas sem nenhũ vento cõ tamanho estrondo, E bramida, E ellas taõ encapelladas que se alevantaraõ mais de sete braças sobre a povoação, como depois constou pellas pontas de hũas arvores mui altas, E antigas que depois apareçeraõ。」と記され、集落(povoação)の上に7braçasの波が立ち上がったとある。『フロイス日本史』[松田(1977)]は、braçaについて「通常ブラサは2.22m、農村では両手を左右に広げた広さ」と解説している。しかし、フロイスがブラサという語を用いる場

合、「どれほどを指したかは個別に検討を要する」とも付記している。したがって7braçasが何mを指すかを当時のフロイスの記述から判断することとした。

§ 4. 『耶蘇会士日本通信』

1579年に『日本年報』の制度が始まる以前にも日本からローマへの報告は行われており、『耶蘇会士日本通信』と呼ばれている。その書簡中に、永禄八年(1565年)にフロイスが京都で、葡人のアルメイダが奈良で構造物の長さを測定した記述がある。現存する構造物に関する記述もあり、これよりbraçaの単位長を推定すると1m程度の値が得られる(表1)。この中で最も信頼性が高いと考えられるのは、東大寺梵鐘である。梵鐘は天平勝宝四年(752年)に铸造されたとされており、アルメイダが見たものが現存する。大きな構造物ではないことから、計測の精度も高いと推察される。また、フロイス自身は三十三間堂の長さを130~140braçasと記述している。これからは1m弱の値が推定される。さらにアルメイダは、東大寺の太い杉の柱は、加工される前には太さが4braçasあったであろうと記述。1braçaを2.2mとした場合には、原木の直径が8.8mとなる。考え難い太さである。フロイスらは1braçaを1m程度と認識していたと判断する。

表1 braça 単位長の検証

構造物		『日本通信』 の記述 (braças)	構造物の 当時の寸法 (m)	braçaの 単位長 (m)	
三十三間堂	長さ	130~140	118.2	0.8~0.9	
春日大社	本殿から燈籠までの距離	50	約50	1	
東大寺	梵鐘	口径	2	2.25	1.1
		高さ	3.5	3.86	1.1
	大仏の座高	14	[14.7]	1.1	
	大仏殿の長さ	40	[88]	2.2	
興福寺	猿沢池(長さ・幅)	どちらも50	[50~100]	1~2	

注:[]は当時のものが現存しないか不変かどうか不明のため推定値

§ 5. 沖ノ浜の津波高

braçaの単位長が1m程度と判断されることから、フロイスは沖ノ浜における津波高を約7mと記述していたというのが本稿の結論である。ただし筆者らは、これをもって沖ノ浜の津波高が7mであったと主張するものではない。ブラサは7braçasという値を、「波が引いた後に高木の全容が現れ、その梢(pontas)の被災によって推量した」と筆者らは解釈するが、その記述は地震の2ヶ月後に記録されたものであり、正確な値を推定するには周辺地域の津波被害状況も加味した更なる検証が必要と考える。しかし、少なくとも15.4mという津波高は否定されたと考える。